「確かな学びをはぐくむ学校づくり」 パフォーマンス課題 校内研修　　R8.10.30（金）

「探究的な学びを実現するためのぱフォーマンス課題」というテーマで、授業研究を進めていく中で、「ルーブリック」「本質的な問い」「永続的な理解」について、理解が不十分であったり、疑問がわいてきたりしてきました。それらに対して、本日は大阪教育大学の八田先生に、ご教授いただきました。以下、ご教授いただいたことの要点まとめです。

○ 講師　大阪教育大学　八田 幸恵 様

1. ルーブリックは「思考・判断・表現」を中心に作る

3 観点すべてに詳細なルーブリックを作る必要はなく、「知識・技能」など　　テスト等で量的に把握しやすいものは、必ずしもルーブリックは必要ない。

「思考・判断・表現」など、質的評価が必要なものは、ルーブリック作成が重要。

2. ルーブリックは 3 段階より 4～7 段階が望ましい

海外では 4～7 段階程度のルーブリックが一般的であり、本来はその段階が評価そのものになる。日本では最終的に ABC 評価へ変換するため、「A の中にも大きな差がある」「B の中にも幅がある」という課題が生じる。

3.「本質的な問い」がパフォーマンス課題の核になる

パフォーマンス課題を作る際には、「本質的な問い」「永続的な理解」を意識することが重要である。

「本質的な問い」とは、「正解が一つではない・探究を継続させる・概念的・哲学的な問い・繰り返し考える価値がある」問いである。

（例） 戦争は社会にどのような影響を与えるのか

絵や彫刻は私たちの生活や社会に何をもたらすのか

4. 永続的な理解とは

「永続的な理解」とは、「他のことを忘れても、これだけは身に付けてほしい理解」である。

学習指導要領に示される「見方・考え方」が、その中心になることが多い。

5.「見方・考え方」を軸に課題を設計する

パフォーマンス課題は、単元内容そのものではなく、その教科特有の見方・考え方を使わせる課題として設計することが重要である。

6. 教科によって作りやすさが異なる

作りやすい教科「理科」

理由：・「見方・考え方」が整理しやすい　・単元で使う見方・考え方が比較的少ない

やや難しい教科「社会科」「国語（特に技能系）」

理由：複数の見方・考え方を同時に扱うことが多い

ポイント
1.ルーブリックは「思考・判断・表現」に重点化する。 2.段階設定は ABC だけでなく、できれば 4～7 段階程度で考える。 3.まず教科の「見方・考え方」を明確にする。 4.その教科ならではの「本質的な問い」を設定する。 5.「他は忘れても、これだけは身に付けてほしい」という永続的な理解から逆算して単元を設計する。

講義後は、各教科に分かれて、講義内容を踏まえ、公開授業に向けての研究協議をしました。八田先生のご尽力で、熱の入った協議になりました。






